



聞き手はフリーアナウンサーの下間 都代子さん

中村雅俊さん 被災地への思いを語る (要旨)

故郷・女川町の思い出

——もうすぐ3月11日、東日本大震災から丸4年が経つという日を前に、皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。
中村さんは宮城県女川町のご出身でいらつしやるんですね。

そうですね。生まれて高校を出るまでは女川です。高校は石巻高校という所でした。
東北地方の沿岸部では地震がある、「地震があつたら津波が来る」という教えがあり、対策をしないといけないものとお子どもの時から思っていました。

1960年、当時小学生でしたが、チリ地震津波がありました。避難勧告が出たので山に逃げ、山の上から「津波が来る」風景を見ました。その時は家の一階の天井まで津波が来たんです。

——凄いですね…。

それ以来、とにかく地震があると津波警報が出て、そのたびに一階の荷物を二階に上げて、津波が来るのをずっと待つということを経験して来ました。

「津波が来ない」ほうが多いんですよ。だから今回の大震災でも、津波が来ると思っている、軽く考えてしまったのではないのでしょうか。

震源地が東北と知って

——4年前の3月11日、地震が起きた時はどちらにいらしたのですか？

地震が起きた時は東京で、ドラマの撮影を電車の中でしていました。もの凄い揺れに驚きました。一緒にいたスタッフの携帯のテレビで震源地は東北だと知りました。しかも女川から程近く、金華山からすぐ東側が震源地だったんです。「これは津波が来るな」と思いましたね。ただ、どの程度なのか想像はできませんでしたが。

——映像での被害が分かったとき、故郷の惨状を見られて、苦しいものがあったんじゃないかなと思つたんです。

陸前高田とか、いろいろなところの映像がテレビから流れてきて「これはひどい」と思ったのですが、一番驚いたのは現地に行ったときですね。最初に訪れたのは4月だったのですが、テレビで見るとより実際に行つて現場を見たときに本当にひどいと思いました。

想像以上の被害に言葉も出ませんでした

——それでも4月といえはまだまだガレキが…。

はい。東京からレンタカーで行ったのですが、仙台から石巻までの道路はまだ亀裂が入っていたり、ガレキが残っていたり、冠水している箇所がたくさんあったので、かなり渋滞していました。

中村さんの活動のようす



石巻駅前広場に「がんばろう! 石巻祭り」にゲスト主演。翌日、松島市役所を訪問、仮設住宅も訪問し歌で励ました。(2011年9月)



女川町に食料を届ける中村さん (2011年4月)



女川町にて (2012年8月)



岩手県山田町へ撮影で訪問 (2012年7月)

女川は港町なのですが、石巻から行くと、いったん坂道を登って、そこから町に入ると下りまです。その手前は被害が少ない地域だったので、下って町並みが見える場所に来た途端に変わり果てた故郷の姿が…。想像以上の被害に言葉も出ませんでした。やはりあの時が一番ショックでした。いつも見慣れていた景色や町並みが全く失われていました。

——本場に途方にくれるという気持ちだったんですね。その後はどういった支援活動をなさったんですか？

最初は義援金を集めました。友だちが「物資を送りたい」と言うので、石巻にいる高校の同級生の、比較的被害の少なかった彼の工場宛に物資を送りました。集まった義援金で、女川の子どものために多目的のトレーニングハウスを贈りました。比較的大きめのものなので、中で映画を観たり、本を読んだり、みんなで集まってミーティングできるような。一台寄贈したのですが、さらにユニセフが同じものを二台、繋げて寄贈してくれました。

自分の身を守るためにどうするか分かっていく

——そうやって小さいころから防災訓練をしていて、意識も高かったにもかかわらず、未曾有の震災被害が起こるんですね…。

地震津波に慣れてきたからこそ被害があるんですね。津波には第一波・第二波というものがあつて、第二波は第一波の平均20〜30分後に来て、第一波よりも第二波の方が大きくなることが多いそうです。チリ地震津波のときは、第一波と第二波の間を山の上で見ましたが、けっこう深い女川湾の底が見えましたからね。

——そんなに引くんですね。

そうですね。びつくりしました。ただ、そういうことに慣れてしまつと、一回目去つた後にちよつと家に行つて財布を取つてこよつとか、大事なものがあつたらちよつと取つてくると言つて戻つてしまふ人がいたり、長い経験から今回の津波は大したことないだろうという考えの人もいたり…。防災や自分の身を守るためにどうするか分かっていくのに、どうしてそういうことをしてしまうのでしょうか…。本心に残念なことが起きていたんですね。

——これからはそういうことが無いようにと思えますよね。

そうですね。被災地に行くたびに話を聞くのですが、被災されて助かった方も悲劇を持っている方がたくさんいます。実は肉親と別れてしまったとか、「こんな思いをしてここにいるんだ」とか…。話を聞くと悲しくて切ない話ばかりでした。

校歌を作った小学校で子どもたちの門出にふれて

——最近も、被災地へおいでになったと聞きました。

はい。一週間前に番組のロケで福島県の南相馬市・二葉町・大熊町、岩手県陸前高田市、宮城県東松山市に行きました。

手前味噌なんですけど、東松島市の小学校の校歌を2年ほど前に作らせていただきました。震災の影響により二つの小学校が統合され、鳴瀬桜華小学校という小学校が新設されました。

——新しい校歌を作られたんですね。まあすごい。

すごいプレッシャーでした。今回のロケは卒業する6年生の鼓笛隊から5年生に楽器を引き継ぐ「引継ぎ式」を見に行きました。6年生が演奏した後に5年生が演奏するのですが、ものすごく感動しました。その後、200人ほどの生徒達全員で校歌を歌ってくれました。目の前でずつと聴いていたら、ちよつとウルウルしてしまいました。子どもたちの歌声っていうのは本当に癒されますね。それを聴いていた父兄の皆さんにも話を聞きました。が、「本当に子どもたちにはずいぶん助けられた」とおっしゃっていましたね。

「やるしかない」と覚悟を決める人もいます

——何度か同じ場所も訪問されているのでしょうか。

はい。この間は陸前高田で醤油を作っている河野社長の会社「八木澤商店」へ再訪問しました。従業員を一人も解雇することなく再開しますと宣言し、復活した会社です。

この震災でがんばらなければいけないという覚悟をした人がすごく多いんですよ。「やるしかない」「つていうか、そういうことが笑顔に繋がっているのではない

と思います。すごくパワフルで力強い人たちがたくさんいて、見た目的には元気な方が多いですね。そのまま元気をエネルギーにして、復興・復旧を続けてほしいですね。

あなたができることは何ですか

——4年経つて、どうしても風化してしまうものもあるのではと思うのですが…。中村さんご自身は、これからどういう形で関わっていくかと考えておられますか？

「3・11のことを忘れない、忘れさせない」ということの次のアクションが大事なのかなと思えます。ただ「ああ、そういうことあつたね」というだけではなく、その先に「あなたができることは何ですか」という気持ちを忘れないことが必要なのだと思います。

あの震災のとき、テレビから流れる映像を見て、全国の方が「何かしてあげたい」という気持ちがあつたと思うんですね。だからあのときの気持ちを忘れないでいると、被災地のために何かしたいと思つた時の一つのきっかけになると思うので。

被災地に行つてボランティアをするだけではなく、「他人事じゃない」という意識を持つだけでも良いと思います。ある友人は被災地で旅館に泊まつたり、食堂で食事したりするだけでいいと言っています。

——最後に、これからの想い・メッセージをいただけますか？

気仙沼や陸前高田など、みなさんが名前を知っているような町でも復興はまだですが、それ以上に小さな港町は手付かずで、もつと復興が遅れている場所もたくさんあります。でもその場所を希望を捨てずに懸命に生きている人や、あんなことをされた海に對しても恨まずに「海とまた一緒に生きていく」覚悟を持って生きていく人がたくさんいます。

「何のために生きていくのだろうか」と、特に高齢の方は孤独死などいろいろな問題を抱えています。みなさんの優しい温かい手をさしのべてあげられたら、またみんなの笑顔が増えるような気がします。

気が向いたら被災地に行つて、人に会つて話をしてほしいです。それで、宿泊したり、お土産を買ったり、食事をしたりして楽しんでいただくことも復興のひとつだと思います。よろしくお祈りします。